

## 長野県支部

### 地域中小製造業（組立系）の“ものづくり技能技術” の好適化に関する調査研究

最近“ものづくり”への関心が高まっている。

それは、日本産業の空洞化問題や国際競争力低下の問題と無関係ではないように思われる点から、本調査研究ではまず空洞化に視点を当て、地域製造業の意識を探った。

地域における機械・金属系の製造業は、高度成長時代に大企業の系列化政策のなかで、下請型企业として経営基盤を築き、成長してきた経緯があり、高技術の習得や開発により専門性・自立度の高い企業も輩出してはいるものの、多くの企業は旧来型の下請タイプから脱却していないのが実情である。

このようななかで、一定の経済力を持つ企業は国内と海外との棲み分けを通じた経営展開を行うか、もしくは親企業の要請等より生産を海外に移行させているが、一方保有する専門技術を生かし、海外生産は一切しないことを標榜している企業も見られる。すなわち、対応は多様であるが、多くの企業は空洞化の影に怯えつつも、国内に残る道を求めて自分なりの経営を考え、努力しているのが実態である。

次に、このような実態を踏まえ、視点の中心を、下請色を残しつつも自立化への道を真剣に考え、取り組んでいる機械・金属系の中小製造業に置き、経営革新のスタンスを“ものづくり”に関する「技能・技術」「人材開発」に関連して「コアコンピタンス経営」に置き、その手法に関する考察を行った。

経営資源に限界のある中小企業にあっては、強みとする部分への経営力の集中は、当然のことではあるが、一般には強みに関する認識は漠然としており、経営活動の効率を阻害している部分が見られる点から、「コアコンピタンス」の発見・評価および「コアコンピタンス経営」の進め方についてまず考察を進めた。

次いで、中小製造業における「コアコンピタンス」は、ものづくりに関する技能・技術であるとの認識のもとに、その強化方法に関する考察を行った。

ものづくり現場は、技術と技能の融合の場である。言い換えれば、「形式知」と「暗黙知」の融合による「人」の場であり、人と人との連携の場である。

それゆえ、ものづくり現場では人間関係がきわめて重要になるが、的確な現場管理を進めるには品質・納期・コストのほかに、技術・技能に関する幅広い知見が必要になる。

最後に、これらの活動を可能とする「ビジネス・モデル」への接近も試みた。

なお、診断実務資料として調査研究委員の手による「コンピタンス経営診断の進め方」および「スキル（技能）・マップによる管理の進め方」を添付した。